

「Wingを広げる。学問だけに偏るな」
この一言で海外へ大きく見聞を広げる

法学部4年 木間逸人さん

「幅広く」。木間さんを語る
上で欠かせないキーワード

である。そもそも法学部政治学科を選んだのも、「社会の出来事について幅広く学びたいと思った」からだ。「もともとは、公務員になりました。政策を通して、問題

を未然に防ぐという仕事に魅力を感じていました」

入学当時をこう振り返る木間さんだが、今春からは出光興産で働く。「ガソリンスタンドのイメージが強いのですが、実は石油だけでなく様々な化学製品も広く扱っている企業です。製品の輸入から、

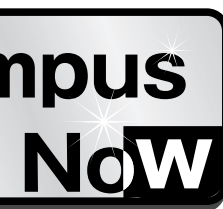


地方のガソリンスタンドに対して経営指導をするなどかなりグローバルな会社です」。

就職先の仕事の内容を聞く限りでは、志望していた公務員とは質が違うように思われるが、どこで変わったのだろうか？

「在学中に志

向が変わったんです。僕は公務員向きではない



のようになって。3年次に経験した国際金融インターンシップが大きかったですね。ビジネスマンになった方が面白いだろうと、このときそう思いました」

国際金融インターンシップは、前期に事前学習し、夏休みには海外と日本国内の企業でインターンシップを行ない、後期にその報告を行なうという通年のプログラムだ。

「中国の深セン、香港、シンガポールで10日間、企業などのスタディツアーを行なってきました。大和証券SMB Cの支店や香港立法府、国内では証券取引所や製鉄会社、証券会社の社員の方々のCSR（社会的責任）に対する見解などを聞き、大変おもしろかったです。世界で働くビジネスマンを目にして、純粹にカッコいいとも思いましたね」

このインターンシップに参加した動機を訊ねた。

「特に大それた理由などはありません。参宮橋のマックで友人に誘われたんですよ。声をかけられて、公務員になる前に民間企業で働いてみるのもいい経験になるん

じやないかなあと。幅広い素養を身につけたいとそのころから思っていましたから」

実際にインターンシップで見聞したことで、木間さんは大きな影響を受けた。香港では、出稼ぎに来ている外国人が路上でたむろしている様子を目にした。「同じアジアでもこういう光景は日本では見られないじゃないですか。日本と世界で起きていることはまったく違うな、と。

そんな時に国際的な感覚は身につけておかなければならないと強く感じました。これからは日本のことだけを考えてはいけないうんだと。シンガポールでは『地方分権』で採めてないんだろな、とか。」

ただ前だけを見て、突き進むのではなく、様々なことにチャレンジして体験し、貪欲に学んできた木間さん。このように広い視野を持つようになったのは、ゼミの先生の一言があったからだという。

「今村（都南雄）教授が常に言っていたんです。『Wingを広げる。学問だけに偏るな』って。この言葉を聞いて僕はハッとしました」とにかく活動は幅広い。法学部ゼ

ミナール連合にも所属し、ゼミ間の架け橋にもなっていた。「夏と秋のゼミ説明会やバレーボール大会などのプロジェクトを運営します。それらの企画を自分たちの手で一から作り上げていくことにやりがいを感じていました」。

法学部の行政系ゼミの有志で運営している都市政策ゼミナールにも携わっていた。「これも友人から誘われて入ったんですよ。ゼミでは行政と企業の関係、特に企業のSRI(社会的責任投資)に興味を持って研究していましたので、行政官や民間企業で働く方々の生の話を伺いに行く都市政策ゼミナールの活動は、僕の関心にマッチしていました。例えば保育所の民営化をテーマに、実際に保育所を運営しているベネッセスタイ

ルケアの社員の方にお話を伺ったのですが、このときは行政機関と民間企業の関わり必要性を感じましたね」。

こうした活動のほかに、就職課程をとり、塾で講師のアルバイトも。その行動力はどこから湧いてくるのだろうか？

「そんな行動力なんてないですよ。どれも、きっかけは友達から誘われただけです。でも先生や友達に恵まれていましたね。やりたいことを先延ばしにしないでやれば、学生の間になんたうてできますよ。何にも好奇心を持つことが大切ですね。たぶん後で知は繋がってくる」

最後に在学生に向けて、こうメッセージを残してくれた。(恒川)

ゼミで学び、国内外の「旅」で人と出会う 目指すは「平和」を伝える報道記者

総合政策学部4年 賀谷真実さん

「デキる女」。最初に挨拶をしたときに感じたオーラで

ある。聞けば、総合政策学部の目加

田ゼミとFLPジャーナリズムプログラム、就職先は超人気メディアの(株)テ



レビ朝日。まさに「デキる女」の道を迷うことなく走っているように見える。

2つのゼミでは、時事問題のディスカッションや地球規模課題である「貧困」や「難民」についてのグループワークを通じ、背後関係など関連する問題を考え、何が問題になっているのか、論点を考えた。

「ゼミはいつも仲間を刺激され、とても意味のあるものだった。尊敬

できる先生に学ぶこともできた」と語る

姿からは、充実した大学生活を伺うことができる。

就職先は、大学生の多くが憧れるテレビ局。「早い時期での就活だったので、集中できた」とはいえたくさんの就職希

望者の中から最終的に選ばれた一人なのだから、超難関をくぐり抜けたわけだ。意思の強さは相当なものなのだろう。

志望は報道記者。ゼミで学んだ「問題を見る力」がまさに発揮できる仕事である。「記者として現場に行き、物事を自分の目で見て、たくさんの人が見るテレビから発信をしていきたい。平和について考える報道がしたい。戦争について実体験した人が少なくなっている今、いろんな人の話を聞いて、それを伝えたい」と目的意識は明確だ。



「文章を書くのは好きだけれども、上手くはない。仕事にするために文章を鍛えてきた」とこれまでの地道な努力に加え、さらに前を向いて「今度は映画や本

から物事を読み取る力を身につけた
い」と向上心も忘れない。

4年間、学ぶことだけを行っていたわけではない。「たくさん旅行をした」。そう言っていてきた地名はスリランカ、インドネシア、タイ、北海道に沖縄と国内、国外ともに書ききれないほどだ。

「大きなリュックを背負って、何も決めないで3週間くらいの旅に出るの！」

「えっ、泊まる場所も決めずにはですか？」

「そう。何とかなるっ!!」

ちよつとびつくりの「冒険旅行」

だが、話を聞いているだけでわくわくしてしまう。「沖縄ではたくさん星を見た。インドネシアでは地元の人バイクに乗ってお祭りに行つた」と目を輝かせる。普通の観光では得られない自然と人との出会いの「旅」だ。

最後に「大学生活で得たものは？」と聞くと、「たくさん友達に出会えたことね」ときっぱり。取材をしていくうちに「デキる女」から「心のある、頼もしいお姉さん」に変わっていった。

(新部)

小学生の頃に弁護士に憧れ 目指す法科大学院進学で着実に近づく

法学部4年 楠大輔さん

楠さんは今春、中央大学法科大学院に進学する。幼い頃から弁護士を志していた。大学に入ると学研連の瑞法会に入会した。弁護士を目指すのは「単純に憧れていたからかな。高校まで動機についてはあまり深く考えたことはないけれど、小学生の頃から弁護士になりたいと

思っていましたね」という。着実に目標に向かって階段をのぼっている。法科大学院への入学試験は大変だった。4年次はその他の試験にも追われる日々だった。旧司法試験など様々な試験が重なった関係で、5月から9月の間は毎月何ら



かの試験があった。

「毎日大変でした。でも、自分だけではなく周りの司法試験を目指している友達もだいたい同じような生活をしていましたね。試験に合格できるようみんな頑張っていました」と振り返る。

法曹界を目指す人にとって、学研連の研究室は格好の環境が整っている学びの場である。楠さんは平均して1日に10時間程、研究室で過ごしている。

「といっても10時間ずっと勉強しているというわけでもないですよ。主に自習室で各自勉強を

していますが、談話室で友達と話したりもしています」

研究室にいるような人はみんな目の色が違うような気がしてしまふが」と聞くと、「そんなことはないですよ。普通の人もたくさんいます。途中で他にやりたいことを見つけて進路変更する人もいます

ね」。

3年次から始まる専門演習は丸山秀平教授の会社法のゼミを選んだ。

「企業系の弁護士活動に興味があったのと、会社そのものの仕組みにも関心があり、そういったことを勉強できるゼミを選びました」という。

夏休みのゼミ合宿は、学部生のために丸山教授の下で法律を勉強している大学院生も参加した。楠さんは説問についての議論で大学院生たちから繰り返し出される思いもよらない質問に苦しめられたという。

「大学院生の質問に答えるのはとても大変でした。しかしこれは予想外の質問に答えるいい練習になった

mpus
NoW

と思っています」

中央大学法科大学院進学が決定し、憧れの弁護士へと一歩近づいた楠さん。順調に夢の実現へと近づいている彼に、後輩へのアドバイスを聞いてみた。

「うーん、僕が人にアドバイスできることなんて思いつかないけど……強いて言うならば、将来自分の

武器になる、自分が他人

に誇れて一番自信のあるものをみつけれられるといいと思います。それと、

自分の適性を見つけることです。学生時代にそういうものが見つけられると、将来きつと役立つと思います」

(駒田)

3年生で早期卒業、法科大学院へ 法律家目指し、中学から一直線

総合政策学部3年 北島睦大さん

細身の体にビシッと決まった卒業単位を優秀な成績で取得し、大学院への進学が決まっていることを条件として3年生で卒業することができる制度である。

とはいえ、それを実現するのは並大抵ではない。北島さんは、早くから将来の明確な目標を掲げ、それに向けて一直線で邁進してきた。この原動力がそれを実現させた。

「将来の目標は法律家です。中学生のときに出会った大平光代さんの著書などがきっかけで、法曹界を目指し始めました」

「3年で卒業しようとは思っていませんでしたが、なるべく早く次のステップに進みたいと思っています。早期卒業制度を利用した訳は、将来を睨んでの決断だった。早期卒業制度とは、総合政策学部の定める



中学校卒業後、法律家

を目指すなら「中央大学」を指すなら「中央大学だ」と考え、中央大学杉並高等学校へ進学。そして

中央大学に入学したが、入ったのは法学部ではなく、総合政策学部だった。「法律家ではなく、色々なことを解決できる能力を身につけたいと思いました」。

明確な理由を持って総合政策学部を選んだのだ。



総合政策学部で3年間学び、卒業後の進路は、法科大学院への進学が決まっている。親の負担も考え予備校へは通わずに決めたという。

これほどまでに優秀だと、3年間勉強ばかりしていたのかと思いたくはないが、「そうでもないです」と北島さん。「1年生の終わり頃から2年生にかけては、1年生をサポート

したり、イベント等を企画するSA (Student Adviser) をやったり、イベントを企画・主催する学生団体に所属して他の大学の学生とも交流を深める活動をしてきました」。学業以外のことにも積極的に関わっていたのだ。

授業に関しては「授業に出ていれば試験はできるので、いろいろな活動をやっていても授業を休むことは滅多になかった」という。北島さんは、中学生の頃から目標を実現するための道を見失うことなく、着実に歩んでいった。

ここまで充実した大学生活を送ってきた北島さん。しかし、大学生に未練はないのだろうか。この疑問に対しては「総政には色々な先生がいるからまだやっていない分野をやり

残した感はある。でも全体を通して見たらやり残したことはないです」という答えが返ってきた。

現在の将来の目標は、中学時代に掲げた弁護士ではなく裁判官。2009年から裁判員制度が導入されることもあり「自分が中心となって問

題解決できる人間になりたい」と力強く答えてくれた。

「頼まれたことには全力で応えたい」という真つ直ぐな性格。これから先も自分を見失うことなく、目標に向かって着実に突き進んでいくに違いない。

(上田)

左手に六法全書、右手にはベースギター 「刑法を学びたい」と法学研究科に進学

法学部4年 菅沼真也子さん

異才の人である。ロックバンドが好きでサークル仲間と組んだバンドではベースギターとボーカルを担当するが、六法全書を開くと顔つきが変わる。この春から中央大学法学研究科に進学して、研究者の第一歩を踏み出す。

バンドに目覚めたのは中学時代。膝を怪我してバスケット部を辞めた際に、友人から誘われたことがきっかけだ。「みんなで作り上げる達成感があったので、大学に入っても絶対にやりたい!」と思っていました。1、2年生の頃はサークル活動に没頭した。中大が生んだミュージ

シャン高木ブー氏がかつて所属していたというサークル『ルナ・ハワイアン』でライブに明け暮れ、渋谷の飲食店でアルバイトをするフツウの学生だった。

もともと法律の勉強は好きなこともあり、3年次には刑法が専門で厳しいと有名な只木ゼミに入った。

チームを組んで2週間に1回、過去の判例を弁護側と検察側に分かれて議論するかたちのゼミだ。周りは司法試験を目指す仲間たちばかりで、最初は議論に全くついていけなかった。だが、「負けず嫌いで、

悔しいと思つて頑張つた」

おかげで、次第に議論を引っ張るリーダー核となった。

ゼミでの学びが、

論点を絞つて勉強していく法律の勉強にはまった。就職も考えたが刑法をもつと学びたいと、法学研究科に進学を決めた。「バンドでも法律でも、ひとつのことを深く追求していくことが性に合つていたんです」。

09年4月から市民が裁判官と共に



審議する裁判員制度が始まる。世論の高まりを受けて刑法犯に対して重罰化傾向が進むが、国民の処罰傾向に寄る添うことが

本当に良いことなのか。そんな疑問が心の中にある。研究テーマの故意論と錯誤論を中心に、「一般の市民と専門家が折り合いをつけられるような解釈を研究したい」と真つすぐに語った。

(滝沢)

大ケガにもめげずチアで初心貫徹 絆を生かして全国大会6位に

文学部4年 横山真里さん

「大学生活を通して何かひとつのことをやり抜きたい」。そんな思いで入学早々にチ

アリーディング部への入部を決めた。チアリーディングは、野球やアメフトの試合で観客を盛り立ててくれる貴重な存在であり、また応援の華で

mpus
NoW

ある。しかし、そんな表舞台の裏には底知れぬ練習量と努力、そして苦労が数多くあった。

2年生になりたての春、腰に大ケガをした。「人間ピラミッドの一番下で人を支えているときに、ピラミッドが崩れそうになってしまったんです。それに耐えようとして」。腰椎分離症。腰骨にひびが入ってしまったもので、このひびは治る事はない。4年間で一番辛い体験だった。

「あちこちの病院を回って、『競技を続けてもいいよ』と言ってくれる先生を探し続けました」。どうし



てもチアを続けたい、その気持ちがこの行動を起こさせたのだろう。そして、ようやく「競技をやってもいい」と言ってくれるスポーツドクターに出会い、一年間に及ぶリハビリが始まった。競技復帰までの間、リハビリをしつつ、部活動にも参加し、後輩たちを指導した。

そんな状況でもやめようと思わなかったのか？と訊ねると、「周りの子の成長していく姿を見て、置いていかれるというような不安感はあるけど、やめようとは思わなかった。一度はじめてた事はやり通したかったし、周りの仲間が待っていてくれたからがんばれたのだと思う」と屈託のない笑顔が返ってきた。

見事一年後に、復帰を果たし、さらに周りの推薦を受けて副キャプテンになった。一年間のリハビリ生活や後輩たちの指導を通して、チアに対する強い想いや、指導力、全体を見る目が皆に認められたからだろう。一年間のケガのブランクを超えて仲間認め

られるための努力は、並大抵のことではなかったに違いない。



副キャプテンというの

は、「キャプテンと部長たちとのパイプ役」であるため、様々な苦労があった。時には「ケガをしたり、泣いたり、泣かせたりもあった」という。これが二つ目の辛かった体験だ。

後輩がケガで苦しんでいるときは、大ケガで辛い思いをした自らの体験を生かして、いろいろと相談に乗った。「自分にしかできないことをしたい」。そんな想いがあったからだ。

そして苦労が実った。全国大会で6位になったのだ。過去最高の成績を残したのである。決勝戦には13

チームが参加するが、決勝出場ははじめてだった。「この成果は、今まで先輩方が積み上げてきてくれたものに、自分たちの代のいわばエッセンスのようなものが重なって出てきた結果だと思います」と先輩たちから引き継いできた「絆」を強調した。

最後に後輩へのメッセージを頂いた。「仲間を信じて、自分を信じて頑張ってください。チアの魅力は、みんなでひとつのものをつくり上げる喜びを感じる事です。信頼がなければ絶対になりません」

4年間、挫折することなく、自分の想いを貫いた人ならではの貴重な言葉として受け止めた。

(今子)

色々と人と出会い刺激を受ける ゼミで学んだ「問題意識」と「行動」

総合政策学部4年 山下翔さん

「頑張れ、としか言いようがないですね。色々と出会

会って刺激を受けながら頑張ることです。中央大学に入ってよかったなと心から思えるように頑張ってほし

いです」

インタビュ어의最後に後輩へのアドバイスを聞いたら、返ってきたのがこれだった。自ら「色々と出会って刺激を受ける」と言うように、

山下さんは大学生活でこれを実践してきた。

「1年生のとき、成績がほとんどAだったんです。特に勉強を頑張ったというわけでもないのに、なんでもこんな簡単にとれちゃうんだらうって。高い学費を払って大学に来ているのに、勉強だけしているのはもったいないなと思ったんですよね」それで活発に活動するようになったのだという。

2年次で、総合政策学部のS A (Student Adviser)に参加した。S Aとは1年生のサポートをする2年生の団体で、山下さんはS Aとして

1年生のために、手作りの入学式を企画・運営した。

最も精力的に活動したのは細野 助博ゼミで公共政策を勉強したことだった。ゼミ長として理論から実践へ移すようなことを何回もやった。

「社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩」で、中大他7大学と合同で小学生に環境教育などを行った。

「多摩地域には中大の他にも明星大学や帝京大学がありますが、全体的に多摩地域の学生は活気がないように感じました。他大学の学生に比べて地味で、場所が田舎といったコンプレックスも持っているような気がします。それで多摩地域の大学がお互いに垣根を越えて活発な活動をしたと思う」というのが、細野ゼミを選んだ動機だ。

充実したゼミ生活を送った。だが、やめたいと思ったこともあったという。「ゼミ長だからやらなきゃいけないことがたくさんあって……。でも、苦しいときも、先輩、後輩を含めゼミ生みんなが支えてくれました」とゼミの仲間にも感謝する。ゼミでは、問題意識を持ち、それに向

けて行動することが大切、ということとを学んだ。

山下さんは、(株)デンソーに内定しており、4月から愛知県で社会人生活を始める。5歳からモトクロスをやっている、車・バイクに自然と愛着を持っていた。それが自動車業界を志望したひとつの理由だ。

就活では、「RE A D E RになれるL E A D E R」をキャットフレンドにした。ゼミなどを通じてまとめ役になることが多かったからだ。「総知総力」というデンソーのスローガンに、人と人をつなげられるような人、つまり自分のキャッチフレーズに近いものを感じたという。

就活について尋ねると、「強気な姿勢で就活していましたね。自分はこちらまでやってきた、という自信も

あったので。実際に10社くらい受けてほとんど落ちなかったです」。

面接ではどんな質問にも正直で率直な答えをした。「例えば、英語はできるかと聞かれて、できません、ときっぱり言いました」。これには、山下さんの性格が大きく影響しているようだ。

「小さい頃から人の目がまったく気にならないタイプで、間違っていると思ったことは相手が誰であれ言わないと気が済まないです。そのせいでよく怒っているというイメージを持たれてしまっていますけど」

「デンソーに入ってできる先輩やOBをギャフンと言わせてやりたい(笑い)。社会人としての抱負にも自信があふれている。」

(駒田)

北京留学で知った外国人との交わり 中国が遠い国から近い国に

文学部5年 洪杏奈さん

初 対面早々に不躰と
は思ったが、「洪」という苗字について伺う

と、「よく聞かれるんですが、華僑の祖父の姓を引き継いでいるんです」生まれも育ちも日本の洪さんにとっ

mpus
NoW





て、中国は近いようで遠い国だった。それが苗字について聞かれるたびに洪さんは、自然と中国に興味を引かれていった。

大学入学で選んだのは、中国語文化専攻。2年生から3年生にかけて春休みには、台湾を旅行した。現地の人との会話では「途中単語が拾える程度」だったが、その経験の中で中国についてもっと学びたいという思いを更に強めていった。

ずっと背筋が伸びた姿勢とまっすぐに相手を見つめる目線からは、自らの肌で中国を体験し理解しようという強い意志を感じる。

思い立ったらすぐに行動に移すタ

「1年間という限られた時間の中で、どれだけ多く人と接することができるかいつも考えていました。中国にいる間は現地の人と多く触れ合いたかった」。現地の人々の飾らない、ありのままの生活を見聞し、新たな人との出会いを求めて「学校が終わった後、自転車よく遠くまで友達と走った」。

ス
ケットボール部マネージャー
を4年間つとめた。となると、てつ

きりバスケットボールをやっていたのかと思つたが、「バスケの競技経験はまったくゼロです」とは意外。

経済学部4年 舘歩美さん

志願してバスケット部マネージャーを4年間 縁の下で支え続け、1部昇格で悲願成就

ただ、現地では中国人の理解できる部分とそうでない部分の両方を見てもしまった。一緒に暮らしていた中国人の学生は環境の違いだろうか、家事を全くしなかった。また旅行のチケットを指定された時間に買いに行ったのに売り切れていたことも……。 「理不尽な出来事は日常茶飯事だった」と顔を曇らせる。

が環境の違う人々とうまく付き合っていくコツなのかもしれない。「外国人の陽気なノリや大げさなリアクションが好きでした。あこがれもありました。外国人同士が集まって、互いに自国語ではない言葉で話をしていく環境が楽しかった。向こうでは毎日が飲み会みたいでした(笑)」

今春からは航空会社に入社、成田空港で勤務する。異文化の人と触れ合う経験を通してその楽しさを実感し、「これからも外国人のいるところで仕事をしたい」という思いで就職先を決めた。仕事では「日常会話にはまったく苦にならなくなった」という中国語を生かす。いずれは中国勤務が待っているかも知れない。

(野口)





もよくあり、選手は何の説明もされないまま練習メニューだけを告げられた。当然、メニューに対する

mpus
NoW

のスタッフの中では一番選手に近い存在。だからこそチームを育てていくには難しい部分も多かった。

「継続は力なり」。まさにこの諺通り、あきらめないうで1部昇格を目指してきた結果だ。「1部に昇格できたことは本当に嬉しかった。でも、

では、なぜハードなバスケットボール部に入部したのだろうか？
「他の大学でバスケット部に所属している姉がいるんです。その姉の試合を見に何度も体育館に足を運んで、団体に競技する『チーム』というものを間近に見ているうちに、そのまともまりに憧れを抱くようになったんです」
高校が進学校だったので部活動をすることなく高校生活を送った。だからこそ、余計にチームのまとまりというものに対する憧れが強かったのかも知れない。また、「高校生活を振り返ってみて、これ」というものが何もなくあった。「これ」という

ものを大学生活では欲しかったんです」という。
いまさら選手にはなれないけれど、「チーム」に携わりたいたいという強い思いからマネージャーになることを決めた。大学入学前のことであった。入学し、行動は早かった。すぐに右も左もわからない広いキャンパスの中をバスケット部の活動場所を探して歩き、いざ入部。しかし、入部した当初の中大バスケット部は前年に2部リーグに降格しており、まさに「どん底」だった。「名門」と謳われた中大バスケット部の冬の時代である。
1年、2年、3年と、毎年コーチが代わった。選手はもちろんだが、マネージャーも苦しかった。

疑問が生まれる。その選手の積もりにも積もったものがマネージャーにぶつけられた。
「何でこのメニューなんだ？」「このメニューの時間を減らせ」などと文句を言われた。
「なぜ自分がこんなに文句を言わなければならないのか…。選手に悪気がないことはわかっていても辛かった。辞めたいと考えたこともありました」
しかし、どんなに練習メニューに対する文句を言われてもメニューを変えたり、時間を減らしたりすることはしなかった。それには理由があった。マネージャーの先輩からこんなことを言われたことがあった。

た。
マネージャーは決して脚光を浴びることはない。脚光を浴びるのは選手やコーチがメイン。そんな中で疑問を感じ、悩んだこともあった。
「マネージャーは居ても居なくても変わらないかもしれない」
「一体自分は何しに来ているんだろう」
しかし、そんな悩みを持ちながらも4年間、マネージャーを続けてこられたのは練習前後の選手とのたわいもない会話や、試合にひとつ勝つごとの喜びだった。「どん底」を味わっているからこそ、その1勝が嬉しくて、勝つと涙を流して喜んだ。チームの勝利に涙を流して喜んでくれるマネージャー。選手にとっても大きな存在だったことは間違いないだろう。

1部リーグを経験することなく卒業してしまふことに寂しさを感じて「まず」と残念そう。

振り返ってみると、部活一色。入学当初に求めていた「これ」という

ものを大学生活で得ることができた。「卒業してからも試合の応援に行きます」「さわやかに笑った。

(宮下)

「日本食を世界に広めたい」 スウェーデン留学が進路決める

経済学部5年 秋葉瑞希さん

日本人でスウェーデンを留学先に選ぶ人は珍しいのではないだろうか。秋葉さんは1年間、スウェーデンのストックホルム大学で学んだ経験の持ち主である。

2、3年生のときにとった田中拓男ゼミが、大きな影響を与えた。田中ゼミは厳しいことで有名だが、「あえて挑戦した」という。ゼミでは『日本小売業の中国におけるマーケティング』をテーマに海外調査し、プレゼンテーション、論文作成を学生中心に進めていった。

ゼミの班活動では、こんなこともあった。「中国からの留学生がひとりいたのですが、他の班の子にその子が自分を出し切れていないように

みえるという指摘を受けました。配慮が足りなかつたなあって思つて。それからはその子も意見を言える雰囲気をつくるように努めました。グループでの調整役の資質も持ち合わせているのだろう。

留学を決意したのは、「もともと国内だけでなく、海外で日本人がどう成功していくかに興味がありました」と国際的な見地からもっと学びたいという気持ちが強くなつたからだった。「周りの人と違うところに行きたかつたんです。実際に行つた人に聞いて、高い英語力を持つスウェーデンに決めました」

留学で得たものは数多かつた。なかでも大きかつたのは、就職志向を



決定づけたことだ。「向こうでは海外の人々が日本のモノを通して日本という国をイメージしていることに気づいたんです。それから日本のメーカーに勤めたいと思ひました。その思いが、今春入社する日本の食品メーカーへの就職につながつたのである。

「ストックホルムで一緒に住んでいた人たちに、お寿司などの日本食をつくつたりしていました。食を通して交流していたんですね。それからみんなを食で喜ばせたいと思うようになりました。こんな留学先での体験が、「食」への関心を高め

ていった。

留学で得たのは語学はもちろんだが、他にグループでのコミュニケーション能力を身につけたという。「私は中間的な立場でみんなを



まとめていました。グループの行動計画を立てたり、授業以外でも寿司パーティーを開いて班員のコミュニケーションを深めたりしました」

インタビュ어도秋葉さんは、まつすぐ目を見て微笑みながら話す。その姿勢には、相手への思いやりがにじみ出ている。心を開きやすい人である。

秋葉さん自身は、「私にはリーダー的な立場は向いていないと思ひます」という。「それぞれ人には役割があると思ひます。私は輪をつくつていく方が向いている気がします」という。自然に周り

に人が集まってくるのだろう。いつしか輪の中心にいるに違ひない。そんな秋葉さんだからこそ留学で得たもう一つ大きなもの、それは友

人の存在である。親しくなった二人の友人を訪ねてポルトガルまで行き、キールナまでオーロラを見に行つた。今度はその二人が「日本に来るんですよ。やっぱり京都とかに連れて行ってあげたいですね」と目を輝かせた。

就職先の食品メーカーには、昨年、海外事業部ができた。新入社員のターゲットは営業からだが、やがては食品企画に進みたいと秋葉さんは願っている。「日本食を世界に広めたいですね」。留学時に描いた構想が現実になる日は近い。

(野口)

ハンドボール部に体育委員長、「自分がみえてきた」感謝の気持ち忘れずに、何事にもチャレンジ

法学部4年 東貴亮さん

「大学に入ってから初めて親の有難さを知った」

そう語るのは、法学部4年で「学友会体育連盟常任委員会委員長」という「肩書き」を持つ東貴亮さん。ハンドボール部に所属し、1年生の終わりから副主務になり、3年生で主務、そして現在は学友会の要職についている。

ハンドボールと出会ったのは、中学生の時。「小学生のころから運動が好きで、バスケットボールや陸上をやっていたけれど、中学に入って何をやるか迷っていたときに、親のアドバイスで決めた」という。

中学時代に香川県の代表に選ばれ、その時に「全国には凄い奴が沢山いる」ということを知り、県内の強豪校へ進学、ハンドボール漬けの生活が始まる。高校卒業後、「自分の将来について想像できていなかった。大学へ行こうか迷った」が、結局は実家のある香川県を離れ上京、寮での生活がスタートした。

「高校までは、家に帰れば風呂が沸いていて、ご飯まで用意されていた。当たり前ではないことを当たり前だと思ひ、自然に甘えが生じていた」。1人暮らしでは

ないが寮生活を経験し、実家のありがたさが身にしみた。

大学生活をスタートさせた東さんは、学部と教職の授業、ハンドボール部、アルバイトの4つを掛け持ちした。朝起きて学校

へ行き、午後8時ぐらゐまで授業とハンドボールの練習、そして夜はアルバイト、1日の全てが終わるのは日付が変わってからというハードな生活を送った。

そして現在は、学友会体育連盟常任委員会委員長。昔から先頭に立って引張る人間だったのかと聞くと、「先頭に立ってやるタイプではない」ときっぱりと否定した。

体育連盟常任委員会では、学生生活の活性化、一般の学生に体育連盟を知ってもらい、大学スポーツの素晴らしさを学内外問わず深めることを目的に活動してきた。「考える、行動する、そういった一連

の流れを自分たちでアクションしていく必要があるから人間的に成長できる。また、人との繋がりが、チームワークの重要性をこの1年の活動を通して改めて実感した」という。



いまは、体育連盟の紹介誌を作成中だ。

「一般の学生と体連の学生には、距離が来てしまっている。せっかく同じ大学に通っているのだからもっと体連のことを知ってもらうって興味を

持つてもらいたい」というのがねらいである。卒業間際まで作業は続く。ハンドボールを始めてからちょうど10年。区切りがついたということ、就職はハンドボール以外の道へと考え、某大手玩具メーカーに就職が決まっている。

「ハンドボールというレールに乗ってここまで来たけれど、大学4

ampus
NoW

年間は試行錯誤しながらも自分のやりたいことを見つけてきた。大学では、高校までには見えなかった自分が見えてきた。それに今までどれだけ甘えてきたか分かったし、親や高校の先生、色々な人に感謝しています」

東さんの口からは「感謝」という言葉が何度も出てきた。

「両親がせっかく苦勞して大学へ行かせてくれたのだから、4年間を無駄にはしていない。自分のやり

フェンシング一筋に歩んだ15年 身につけた精神力とともに新たな道へ

昨 年秋に行われた第57回全日本学生フェンシング個人選手権大会の女子フルーレで優勝。輝かしい成績を持つ。

でも身長151センチと小柄で細身の体つき。失礼ながら「きゃしゃです」というと、「そうでもないです」と腕まくりしてみせた。左腕に比べ右腕の筋肉がずっと太く硬い。一見で判断してはいけないと反省した。小学2年生の時に3歳上の姉と

たいことをやるう」と決

意し、様々なことにチャレンジした。「充実した

大学生を送ってきた」

と振り返り、「4年間全部が思い出

と満足げな表情で語ってくれた。

人との繋がりを大切にしている東さん。社会人になっても「感謝」の

気持ち忘れずに人生を歩んでいくことだろう。

(上田)

商学部4年 寺下真葵さん

もに週3日、近所のフェンシング教室に通い始めた。元フェンシング選手だった父親が、先輩が開いたフェンシング教室に先生として行くようになり、勧められたのがきっかけだった。

「フェンシングに全然魅力は感じなかったです。ただ姉がフェンシングをやめると言い出した時に父親がとても厳しかったので、やめられな



半ば強制的に始まったフェンシングの道。そう

はいつても、小学6年生

の時には全国大会の高校

年の部で優勝した。地元の中学校に

上がってもフェンシング教室には通

い続けた。学校が終われば教室へ直

行する日々。友

達と遊ぶことも、

やりたいことも

制限されただろ

うに、「あまり

つらいと感じた

ことはありませ

んでした」とい

う。

中学校時代に

も着実に成績を

あげ、高校は地

元福井を離れ、

スポーツ推薦で東京へ。インターハ

イではフルーレ5位、エペ6位に入

賞。その実績が認められ、中大へも

スポーツ推薦入試で入学した。

フェンシングには「フルーレ」

「エペ」「サーブル」の3種類があり、それぞれ武器やルールが異なっている。日本では初心者には3種類の中最も軽い剣を扱う「フルーレ」から始めるのが一般的である。寺下さんが主に競っていた種目もこの「フルーレ」だ。

フェンシングは、競技の性質上、身長が高く手足の長い選手が有利。小柄な寺下さんは人より動くことでハンデを克服するように努力したという。

中大のフェンシング部は、その当時、男子部員が15人程度在籍していたのに対し、女子部員は4年生に一人、3年生に一人、現在、女子部員はゼロだ。そのような環境だったため、普段から女子よりも力やスピードのある男子との練習をこなした。3年生になると女子部員は自分一人になった。

「合宿の時は一人部屋なので、さみしかったですね。でも、他の部員たちが男女の違いを感じさせないよういろいろな気を配って接してくれたのでよかったです」と感謝する。

実は、中大フェンシング部の戸田



壮介監督は寺下さんの父親の先輩で、前出のフェンシング教室を開いた巻下明さんの師匠にあたる人物。つまり幼いころからの知り合いなのだ。

1年生の時、戸田監督から誘われ、大学での練習後に渋谷にある監督の道場に通い、個人的な練習も行った。その結果、JOC（ジュニアオリンピックカップ）で優勝。ジュニアのナショナルチームの一員としてオーストリアへ遠征した。

しかし、その後「道場へは、面倒になって行かなくなってしまったんです。そうしたら、結果も出なくなりました」。2年生になり、成績が伸び悩む。監督からは「もうお前には教えない」と言われ、1年間には全く指導のない状態に。その当時はわからなかったが、3年生になって「自分が天狗になっていた」ことに気づいた。

1年生の時、新人戦でエペ優勝、フルール2位。そしてJOCでの優勝。知らず知らずに思い上がっていた自分の姿があった。それに気づいたころ、ある合宿で監督に呼ばれる。スランプ状態の寺下さんに「見るに見かねた」監督からの助け船だった。そこ

から、以前のように週4、5日、渋谷の道場に通う日々が始まった。いつかの、やらされていたフェンシングの姿はもうどこにもなかった。

この練習が功を奏し、3年生の時、念願の全日本学生フェンシング個人選手権大会で3位入賞。そして4年生になり迎えた大学最後のこの大会では、直前練習の不調に見舞われながらもOBからのアドバイスや監督からの喝で乗り切り、フルールで優勝、全日本フェンシング選手権大会へ出場。この大会ではフルール8位。大会を終え、約15年のフェンシング生活には一旦、終止符が打たれた。

「フェンシングは続けないつもりです。フェンシングのない生活、時間に縛られない生活がしてみたいんです。やりたくなくなった時に、趣味でやりたいです」。その言葉には、達成感も感じられる。今、何がしたいか、と尋ねてみると、「まだ終わった実感がないので、わからないんです」とはかみながらも少し困った表情をみせた。この春、地元福井に戻り、事務職の仕事に就く。

後輩たちの成長を楽しみにしつつ、フェンシングで学んだことを胸に抱

4年間で得た「入とのめぐり合い」 「母校に恩返しをしたい」と感謝忘れず

きながら、新たな生活に歩み出す。
(池田理)

商学部4年 神田まりさん

今春、ベンチャー企業に就職する。それは壮大な人生計画のはじまりである。「5年間社会人として精一杯働く。それからアメリカの大学院で心理学とMBAを学びたい。そしてアメリカで働いて、ゆくゆくは地元の沖繩で小さい塾のようなものを開きたい」と人懐っこい笑顔で語る。

大学4年間で得られたものは、「人とのめぐり合い」ときつぱり言う。

行動派である。よく講演会に出かけた。興味を持った人には手紙を書いてアポイントを取り、直接話を聞きに



行く。就職する企業の社長にも直接話を聞きに行き、その縁で就職することを決めた。また卒論発表会などでアドバイスをくれた先生方、学費のことで暖かい声をかけてくれた職員など、「そういつた人々に出会えたことが中央大学の4年間で一番得られたことです」と感謝を忘れない。1年の時にとつた経営史の授業

ampus
NoW

がおもしろくて、先生の研究室まで行って話を聞いた。4年の時には、同じ先生の授業をとり、「本当の意味で理解することができた」という。ゼミでは計量経済学を学び、「切磋琢磨しながら結果を出すことの大切さを学んだ」。

小学生の時に会った恩師の影響で教職も志し、大学で教職課程を取ってその夢を実現させた。教職実習では先生や生徒にめぐまれ、「教壇からおりたくない」と思ったそうだ。一方、2つの学生団体に参加、商

学部ゼミナール連合とインナー大会の実行委員をつとめた。商学部ゼミナール連合に入るとは、高校時代に商ゼミの方の話を聞いてから決めていた。そしてアルバイト。3つのアルバイトをかけもちしていた時期

もあった。奨学金で足りない分の学費を自分で工面していたのだ。

ある大手企業でアルバイトをしていた時、「個人情報ばかりしているし、アルバイトに対する心遣いも素晴らしくて、大手の企業はやっぱりすごいって思ったんです。けれど、体調不良などで誰かが休んだ時に他の人でその仕事がかバーできてしまう。これはさみしいことだな、と思いましたね」と一種の職業観を体得した。

社会に出たら、「素晴らしい人材を育てられるような社会人」を目指す。「将来母校に本やパソコンなどを寄付し、恩返しをしたい」という。夢はあくまでも大きい。(野村)

3つのサークルで活動した体験生がし 教師として自分と向き合う大切さを伝える

文学部4年 新島麻貴さん

教 職と学芸員課程を履修し、現役で教員採用試験に合格。今春から教壇に立つことになっている。

「私、サークルを3つやっていましたよ」。3つ？とは、ちょっとびつくり。英会話研究会、絵画同好



会、史蹟研究会の3つを並立させたという。どのようにしてスケジュールをこなしていたのだろう。

「途中でやめられない性格なんです。だから活動が週に1度とか自分のペースでやれるものを選んで決めました」。一つ一つ真剣に取り組んだサー

クルで学んだことは、進路決定にも大きく影響する

ことになる。「英会話研究会で班長を務めた経験から人と人との対応力を身につけました。相手の立場になってその人は何を考えているか、何に悩んでいるか徹底的に考える。そしてそこでのようなアドバイスをができるかを考える力です」

はきはきとした語り口調には、威厳があり自信にあふれている。



だと思っただけで、その子の方向性を手助けしました」という。

悩んでいる人の助けになりたいという気持ちは、教師という職を選ばせることにつながって

いった。学習塾で「教師のタマゴ」としてアルバイトもした。

どのように生徒と心を通わせていたのだろう、と聞くと、「まず話す前にその子の顔色や行動を徹底的に観察します。そこから話しかけていく。また、自分のエピソードも話しますね」。新島さんも最初は自分の

力が信じられなかったそうだ。「高校の時はよく悩んでいました。自分って何なんだろうって。でもその時悩んだからこそ、その反動で大学では何でもやってやろうって思うようになったんです」。

そんな新島さんのチャレンジ精神を支えてくれたのは、大学で出会った友人だった。「初めて私の欠点をはつきりいつてくれる子でした。真剣に話を聞いてくれた。誰よりも信頼できますね。経験豊かな子で、何にでも挑戦しているのを見て、私もやろうと思いました」と友人を鏡に

企業との共同研究が特許出願へ 就職しても「音」で製品に貢献

理工学部修士2年 白方翔さん

「リズム感および音質経時変化を考慮した精密情報機器の快音設計」。理工学部精密機械工学科修士2年の白方翔さんは、この長く難しい単語が並ぶ研究テーマに取り組んできた。要は家電製品の騒音、雑音をいかになくすか、またはいかに快適な音にするか、が研究の

して自分をしっかりとみつめることができた。

「教師という職は生徒に自分と向き合うきっかけをあげられると思っただけです。自分を見てくれる人がいることに気づくこと。それが自信をつけるためには必要です。他人に認められることが絶対に必要です」

新島さんは大学でさまざまに挑戦してきたことを通して、「教師」という職業に結びつけた。この体験を生かし、これからは生徒たちに自分と向き合うことの大切さを伝えていく。(野口)

目的で、そのために実験を重ねてきた。その成果が「特許」という形で実った。企業との共同研究により特許出願へと結びついたのである。

「もともと音楽が好きで、大学に入る前から、中央大学には音関係の研究をしている戸井武司先

生がいらっしやることは知っていました。研究室選びは迷いなく戸井先生の研究室にしました。企業との共同研究なので非常に忙しく、結果が求められ、スケジュールもシビアでしたが、やりがいがあったと思います」

研究は決して楽ではなかった。「うちの研究室での研究はみな共同研究なので、週六日、時には七日、朝から夜まで研究室にいます」。泊り込みで実験というときも度々ある。「僕はあまり泊まることはありませんでしたが、今も大学に11連泊の人がいますよ」というから驚きだ。

「でも、研究室にいる時間が長い分、仲間とは非常に仲良くなれまし



た」

辛かったこともある。ハワイで行われた国際学会に参加したときのことで。「研究がまだ完全に固まっていなかったのに2件同時に申し込んだこと、国際会議なので英語で全てを準備しなければならなかったこと」。昨今研究室内には国際会議を経験した人がいなくなったというからなおさらだ。

「わからないことが多い、たくさんの方の不安を抱えて行きましたが、今思えばよい経験になったと思います」

卒業後は精密機器を扱う企業に就職する。「音に興味があつて今の研究室にも入ったわけですから、今後も音という側面から製品に貢献でき

mpus
NoW

たらと考えています」という。

大学に入る前に好きなことを見つけ、大学ではそれを学び、研究し続けた。4月からは、社会人1年生と

して一貫して培ってきたものを仕事で生かせるように意気込んでいる。

(橋本)

奨学金は全額、感謝を込めて親へ 人好きで、製薬会社の営業職に就く

商学部4年 渡邊大祐さん

「授業は絶対に休みたくなかったですね。学校が第一です」。

学生なら当然の発言なのに、何か特別のように聞こえてしまう。なかでも語学の授業に関しては「順位がつかものでは負けたくないというのもあった、予習・復習は決して欠かさなかった」という。

順位にこだわるのは「カートの影響」らしい。小学生のころからレーシングカートを続けている。高校では東海地区4県の頂点を決める大会で2連覇を果たした。大学に入っても週末に地元名古屋の大会によく参加している。

あくまで学校が第一なので、アルバイトも「授業に無理が出てはいけないから」と時間の自由が利く、派

遣の仕事を選んだ。徹底して授業を優先した結果、2年のときに学部から給付型のセルフサポート奨学金を受け取ることができた。

そしてその奨学金は「親に全額渡しました」という。「学費の3分の1にしかならないけど。親には感謝しているから」そうだ。

「高校まで18年家において、ろくに家事もしなかったから。一人暮らしを始めて親のありがたみが分かりました」

同じように友達のありがたみも分かった、という。語学や体育など毎週顔を会わせる人との仲は大事にし、何かの機会が縁があった人との仲も大切にしている。入学したときに知り合ったウェルカムパーティー以来



の付き合いは今も続いている。

「人が好きなんですよね。しゃべるのも好き」

と自己分析する。「先生それなんです か？」

とかすぐ聞いちゃうし

(笑)、事

務室のおば

ちゃんや

食堂のおば

ちゃん、誰

にでも話し

かけます」

とか。

この春

には大正

製薬のSR

(一般向け

医薬品の営

業職)に就

くことが決

まっている。

人と接することが本分の仕事だ。製薬会社には「地味そうだし、はじめはあまり興味はなかった」。でも友人に誘われて何となく見に行った説



明会で「面白そうだな」と興味がわいた。エントリーした企業は当初目指していたテレビ局と大正製薬の2社だけ。「自分の1枠のせいで誰かが不採用になるかもしれないから」

というのが理由だ。

休み中はもっぱら友人と旅行。カナダにオーロラを見に行ったり、先日は沖縄でスキューバダイビングをした。「ゴルフやスノボをしたり…、どんなことも経験。あと語学が好きだったので短期留学に行ったりしました。『な

んでも経験しておこう』、男の子の格言です(笑い)」と後輩にメッセージを残した。

(橋本)

3年次に編入、「人との出会い」が収穫 マーケティングを学ぶため大学院へ

商学部 4年 須藤祐司さん

この春、マーケティングの勉強をするため大学院（商学部研究科ビジネスコース）へ進学する。

院で学んだことを生かし、ブランド戦略や広く流通全般の仕事に携わることを目指す。

マーケティングに興味を持ったのは3年次に大阪の大学から中大へ編入してきてから。「一番の収穫は人との出会いですね」と断言する。

2年間という限られた時間の中でいろいろな人に出会いたいと思い、様々な活動に意欲的に取り組んだ。

3年の前期に参加したCAP（商ゼミ連が主催するビジネススキル向上プログラム）は、それまで同学年、同性との付き合いが多かった人間関係が広がるきっかけになったという。

数度の勉強会を経て、最後には日経B Pの編集長を迎えてのプレゼン大会に挑んだ。面識のない人同士でグループを組むことになるのだが、

それを機に「学年、男女の別なく知り合いができた」。そうして知り合った人と勉強したり遊んだりするのは「とても新鮮だった」という。

プレゼンではビジネスのプロによる講評を受け、「まだまだ社会じゃ通用しない」と実感したものの、同時に「大変な作

業を最後までやりとおせたことは大きな自信にも繋がった」と振り返る。

就活も行ったが、編入当初から院

への進学をぼんやり意識していたということで、「もし（内定が）貰えればいいな」くらいの軽い気持ちだった。しかし、就活を経験することで自分の興味のある分野が明確になり、さらにはそれを深く勉強するため進学したいとの意思が固まった。



進路を意識し4年次からは大学院の予備校に通った。主に社会人を対象にした予備校で、受講生は家庭を持っていてる人、大企業の社員、ベンチャーの起業家など様々。「それまでは『社会に出たら半分人生終わり』

志望者向けの予備校に通った。主に社会人を対象にした予備校で、

受講生は家庭を持っていてる人、大企業の社員、

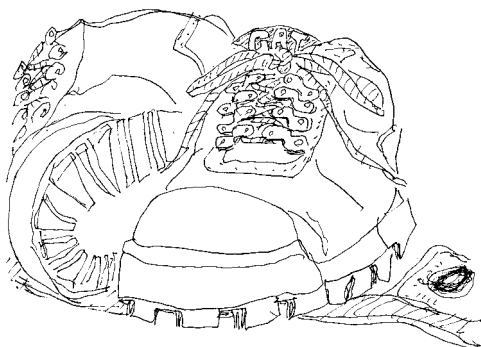
ベンチャーの起業家など様々。「それまでは『社会に出たら半分人生終わり』

みたいに思っていたんですが、みんな社会人になってからも向学心を持ち続けて、それでいて仕事も楽しんで

やっている人たちがばかり。刺激的だった」。

ゆくゆくは自分もビジネスワールドで活躍したいとの目標が出来たが、「しばらくは学生の立場を生かして勉強。大学院ではゆっくり余裕を持って好きなことに取り組む」考えた。

（国本）





Campus NoW

学生記者取材班

【大学院】

橋本奈緒美 || 理工学研究科修士2年

【4年】

滝沢孝祐 || 総合政策学部

【2年】

池田理沙 || 文学部

上田雄太 || 文学部

駒田恵 || 法学部

武田朋実 || 法学部

恒川賢史 || 法学部

新部真子 || 文学部

【1年】

今子佳奈 || 文学部

国本悠希 || 商学部

野口未由希 || 文学部

野村茉莉亜 || 商学部